

2021年度教員による授業相互参観実施状況報告書

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など)	次年度への課題
法学部	<p>【法律学科】全専門科目 【政治学科】専任教員全科目 【国際政治学科】専任教員全科目</p>	<p>【法律学科】4科目 【政治学科】3科目 【国際政治学科】3科目</p>	<p>【法律学科】 2021年度の『犯罪学』において、第5回の講義を担当教員以外の刑法教員が担当し、これに伴って、相互に授業動画を閲覧し、意見交換を行った。第5回の講義を担当した教員は1回目から4回目までの動画を閲覧し、解説の内容が信頼でき、授業の進め方も非常に整理されており非常に聞き取りやすかった。科目の性質上、要所で学生自身に考えさせるような問いかけ等と相性が良いのではないかとコメントした。本講義の担当者は第5回目の講義動画を閲覧し、学生に統計資料へのアクセス方法についても丁寧な説明がなされ、オンラインの特性を活かしつつ、学生による自学自習も可能にしていた、前後の繋がりを意識した形で講義が行われており、大変聞きやすかった、とコメントした。 1年生対象の『法学入門演習』をリアルタイム・オンラインで開講していた3名の教員の授業参観をした教員は、パワーポイントの使い方(学生に判決の内容をイラストを使って報告させる)、学生の発言を促す工夫(学生を指名したり、学生に順に司会者になってもらうなど)、学生のプレゼンテーションの工夫(ニュースから映像を切り取ってそれを流すなど)など、少人数でのリアルタイム・オンライン授業のあり方として大変参考になったと報告した。</p> <p>【政治学科】 政治学科では、今年度より新設された必修科目「政治学入門Ⅰ・Ⅱ」の講義動画・資料を他の教員も閲覧・参照できるようにした。これにより、学習課題についての知見、考察・分析手法、教授法を相互に知ることができた。また、複数の教員によって担当される「現代政策学特講」においても授業内容の相互参観および意見交換が行われた。 また、1年生向けの「政治学入門演習」(8クラス開講)においても、「政治学入門Ⅰ・Ⅱ」と緊密に連携し、その講義内容を相互に参照する機会を設けた。それに加えて、「政治学入門演習」の担当教員間で全クラスの学習成果を共有した。このことにより、特に少人数教育の教授法の理解が深まった。</p> <p>【国際政治学科】 国際政治学科の必修科目である「国際政治への案内」は、今年度も複数の専任教員が担当し、各教員の専門的見地から、国際政治学に様々な学問的なアプローチがあることを講義した。今年度もオンライン授業の特性を活かし、レジュメやスライド資料などの授業教材を学習支援システムを通じて全員が共有し、教員間で講義内容を確認しながら授業を実施した。 また、今年度から始まった「国際政治ワークショップ」では、共通のテーマで複数の教員が講義するため、事前の打ち合わせを行い、かつ授業教材や学生からのフィードバックを共有した。学生のプレゼンテーションの準備および本番においても、教員が意見交換をしながら授業運営を行った。 同じく今年度から始まった「戦後国際関係史」は、4名の担当教員が毎週入れ替わりながら講義するスタイルをとり、授業教材を共有しながら授業の進行具合を互いに確認しながら授業を行った。また最終回には全教員が参加して授業を総括し、互いに質疑応答しながら意見交換を行った。</p>	<p>【法律学科】 対面授業のみならず、オンライン授業の参観も得るところが大きいことがわかった。オンラインの場合には、資料やURLを事前に送るなどの対面の際にはない教員間の事前連絡が必要だが、引き続き希望する教員が参加できる態勢を整えていくことが次年度の課題である。</p> <p>【政治学科】 次年度も「政治学入門Ⅰ・Ⅱ」と「政治学入門演習」、また「現代政策学特講」を軸とした講義動画・資料の相互参照の仕組みを維持し、より緊密な相互参照が可能になるよう、共有の仕方等にも工夫をする。「政治学入門演習」に関して、担当教員ごとの教授法の共有、学生の学習状況についての情報共有をより緊密に行うことを目指す。</p> <p>【国際政治学科】 今年度から始まった「国際政治ワークショップ」や「戦後国際関係史」の授業運営は円滑に進んだが、今年度の学生からのフィードバックを受けて、よりよい授業を行うためにさらに意見交換を行う必要がある。また、次年度は担当教員に入れ替えがあることもあり、新規に担当する教員と今年度の授業を担当した教員の間で授業の相互参観を行うことで、授業のさらなる改善に取り組む必要がある。</p>

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など)	次年度への課題
文学部	98科目	7科目	<p>例年どおり、5月に公開科目を一覧表にして、専任教員に配布した。昨年度は感染症の影響で春学期に参観を行わなかったが、今年度は春学期・秋学期ともに実施した。授業相互参観が実施されたのは、学部全体で7科目、参観者は(延べ)49名であった(昨年度は実施10科目、参観者61名)。年間を通じてほぼオンライン授業であった昨年度とは異なり、今年度の授業は対面形式を基本としたが、ハイフレックスで行われた授業も多かったことから、参観の方法は対面とオンライン双方に広がりを見せたといえる。その甲斐もあり、今年度も昨年度に引き続いて活発な授業相互参観が行われ、授業(ハイフレックス形式を含む)の進め方や教材の活用法等について、教員間で積極的な情報共有がなされた。</p> <p>また、各学科でFDミーティングが開催され、学生の学習状況についての情報共有や、授業の実施方法等に関する意見交換が例年どおり積極的に行われた。さらに今年度は、専門科目と教養科目の両方を見据えたカリキュラム体系の構築を目指し、学部を挙げてカリキュラム改革の準備を進めているが、FDミーティングにおいてもカリキュラム改革について検討が進められ、学科ごとに改革の概要が決定したことは大きな成果といえる。</p>	<p>【哲学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> カリキュラム改革を滞りなくすすめる。 新年度におけるコロナ禍の状況に即応した授業の実施策を必要に応じて検討する。 卒業論文提出者の割合がやや下降していることへの対応策を検討する。 <p>【日本文学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業参観に関しては、ZOOMのURLや授業動画のURLを学科内で共有したことで、実際に足を運ぶ従来の方式よりも、参観へのハードルが下がったように思われる。しかし、今後は対面授業に戻してゆく方針であるから、そうなった際に参観者数を維持することが次年度の課題であろう。とはいえ、コロナの状況によっては、オンラインで実施せざるを得ない回数も少なからずあるかと思われるので、そういった時期に参観を促すメールを学科教員に送信するなどして、相互授業参観の活性化を図りたい。 <p>【英文学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> 引き続きFDミーティングを開催し、効果的な授業実施方法についての意見交換および教育内容の検討を行ない、必要な改革や改善を実施する。 <p>【史学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> 引き続きミーティング等で学生の状況について情報共有に努めたい。 <p>【地理学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> FDミーティングは定期的に行われ、授業相互参観科目数も増やしたが、授業相互参観の実施科目数は増えていない。今後は実施科目と参加者数を増やすことができるように学科で努めたい。 <p>【心理学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> 特になし。 <p>【文学部共通科目】</p> <ul style="list-style-type: none"> オンライン授業が、アクティブ・ラーニングの要素をふくむ大人数授業でも機能することが確認されたが、教員と学生の双方が慣れるまでに数週間の時間を要した。来年度は、本年度の総括をしっかり行なうことで、改善点を確認し、できるだけスムーズに授業が軌道にのる準備をしたい。
経済学部	72科目	8科目	<p>(1)実施方法</p> <p>①公開方法 経済学部専任教員は各担当科目のうち原則1科目は授業相互参観科目とする。</p> <p>②参観方法 経済学部所属教員は、所定の期間内にあらかじめ参観申込をしたうえで授業参観することとする。</p> <p>③公開期間 2021年6月14日(月)～6月18日(金)</p> <p>(2)授業実施者へのフィードバック等 参観申込み者には、執行部まで①授業担当者に対する感想、②授業担当者に対する感想については、授業担当者本人にフィードバックを行った。</p>	<p>(1)公開科目数に対して実施科目数が少なかったため、実施時期直前の周知を工夫し、実施期間の延長等を検討し、実施科目数を増やし、経済学部の教育力の向上を図ることが今後の課題である。</p> <p>(2)兼任講師を含めた授業参観の対応については、今後、検討していきたい。</p>
社会学部	全開講科目	33科目	<p>①オムニバス型の授業での実施(2科目) 教員間で、授業の方法や内容に関する打合せを行っている。参加した教員にとって、今後の授業運営の参考となっている。</p> <p>②本学部ゲスト講師制度を利用した外部講師を招いての授業をとおした実施(31科目) オンライン上で外部講師を招聘し、その授業を参観するだけでなく、外部講師との意見交換を行った。授業方法や内容に関して、刺激を受けることができた。</p> <p>③専任教員担当の授業に別の専任教員をゲスト講師として招く形での実施(2科目※②と重複) ゲストとなる専任教員に別のテーマで話をしてもらい、担当教員とゲスト教員と学生たちとで議論を交わした。</p>	<p>授業相互参観を含めた教員間の交流を通して、授業の方法・内容のさらなる改善を図ることを促す。今年度もオンライン授業が大半を占めたが、ゲスト講師制度の利用が昨年度より大幅に増加している。オンライン上でもゲスト講師を招聘出来る事が浸透してきたため、今後も授業内容の充実化や活発な議論の機会を増やす機会にした。</p>

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など)	次年度への課題
経営学部	専任・兼任・兼任教員の全科目(演習等の小規模授業は除く)。	9科目	(1)実施方法・時期等 公開対象は、原則として専任・兼任・兼任教員による講義授業とした(演習等の小規模授業は除く)。参観は2021年5/31(月)～10/30(土)の授業を対象とした。また、参観者は、参観を希望する授業日の1週間前までにe-mail等で担当教員に直接申し入れる事前申込制とした。 (2)効果等 参観者は、執行部および授業担当者に対して授業内容の感想や改善点について所定のフォーマットを用いてフィードバックを行った。	・実施科目数が9件と少なかったことが課題としてあげられる。次年度は事前周知を徹底することで実施件数を増やしたい。加えて、参観者のほとんどが専任教員であったことから、兼任講師への周知も積極的に行っていきたい。 ・今年度の授業参観の実施は、オンラインで実施している授業が対象となった。来年度は多くの科目が対面に戻ることから、今年度同様に教員間の意見交換を積極的に行い、オンライン・対面双方の授業形式について授業改善を図っていきたい。
国際文化学部	専任教員が担当する全科目	21科目(春学期13科目、秋学期8科目)。ただし、同一科目名で曜日・時限の異なるものは複数科目とした。	春・秋学期ともに、教員から参観をすすめる授業の科目名・曜日時限・教室・公開時期を募り、オファーのあった科目をリストにして教授会で共有、相互授業参観をよびかけた。前年度は参観できる授業を対面授業とリアルタイムオンライン授業に限定したことで公開科目数が減少したため、2021年度はオンデマンド授業についても参観可能とした。授業を参観した教員からは、授業運営における具体的なヒントが得られた、自分の授業を振り返り考えることができたなどの回答が寄せられた。	参観に参加する教員が減少しており、現在の形式で「相互授業参観」が機能しているとは考えにくい。相互参観の目的が授業に関する「相互批評」「ノウハウの共有」であると考えれば、現在の仕組みのあり方について再考すべきかもしれない。また、さまざまな情報の取りまとめの効率化、省力化のためにもICTをもっと活用する必要がある。
人間環境学部	全科目	7科目	1. 「人間環境学への招待」 この1年生の春学期全員必修授業では、毎回それぞれ2名程度の教員が各自の専門性を踏まえた講義を行っている(今年度はほぼ全員が登壇した)。この授業は、毎回参加する世話人(3名)にとっても、各回担当者にとっても、相互の授業の手法や研究アプローチを知ることができる貴重な機会となっている。 2. フィールドスタディ コロナ禍のため規模を縮小して実施したが、7コースのうち3コースで複数教員が企画・運営にあたった。事前・事後授業や現地訪問において、専門がちがう教員相互がお互いに啓発し、刺激し合う格好の機会となっている。 3. ゼミの合同開催 オータムセッションを利用して2つのゼミ(研究会A)を合同で開催する試みを行った。プログラムは4年生の卒論発表、テキストに基づくグループディスカッションと全体発表であった。学生たちからも好評を持って迎えられたが、参加教員にとっても視点を相対化し視野を拡大することができる、充実した時間であった。 4. ゼミへのゲスト参加 2名の教員が相互に相手のゼミに出席し、コメント・公表を行った。ひとつは研究会修了論文発表会であり、もうひとつはゼミ担当教員の著書の書評会であった。ゼミ指導教員とは異なる専門分野の研究者との交流は通常望んでもなかなか得られるものではない。学生にとっても、教員にとっても刺激的な経験であった。	左記4つの試みのうち、1. 2. はカリキュラムの中に組み込まれているが、3. 4. は教員相互の自発的なイニシアティブに基づくものである。こうした部分的な試みを学部全体に広げていくことが今後の課題である。オンラインの場合、相互参観に対する教員の物理的・心理的ハードルは対面の授業の場合よりも低くなると考えられる。オンラインを積極的に活用するとともに、単なる「参観」の枠を越えた教員同士の研究交流・合同授業の場を今後も用意していきたい。
現代福祉学部	本学部専任教員の担当科目(ただし、演習・実習科目、情報・調査系科目、言語コミュニケーション科目、その他、担当教員が公開を希望しない科目を除く)	3科目	<実施方法> 今年度は、新型コロナウイルス感染症が拡大した時期には、1年生の一部の授業を除き、オンライン授業に切り替えたが、状況が落ち着いている時期は、大規模授業はオンライン授業を継続したものの、対面での授業を再開し、教育的効果を期待できる場合に限ってオンライン活用を進めることとした。その点から、今年度の授業相互参観は、「対面授業」と「教育的効果を目的としたオンライン活用授業」について実施した。 <得られた効果> ・対面授業については、学生のグループワーク発表会の聴講と評価を行った。「社会課題への視点とそれを解決するための方策を考えることともに、グループで検討したプランを第三者に伝えるプレゼンテーション能力も養われている」「チームの発表と参加者との質疑応答を通して、いずれのチームにも授業担当教員による適切な指導が行われたことを推量できた」と、授業内容や進め方について前向きな評価を得た。 ・教育的効果を目的としたオンライン活用授業については、国内外の社会福祉に関する現場と繋ぎゲストの話を交えた内容の聴講と評価を行った。「オンラインを通じて、日本に居ながら海外の現場から経験者のお話を聞くことで、学生もその環境を実感できていた」「オンライン上で、学生からゲストへのチャットで多くの質問が寄せられ、講義科目でも目的を明確にしてゲストスピーカーに参加してもらう機会は、学生の学習意欲を高め、視野や理解を深めている」「Googleフォームを使っての事前アンケートをはじめ、アンケート集計等を使って学生の意見を視覚的に共有するなど、授業を進めるスタイルも大変参考になる」など、オンライン活用の利点について評価を得た。	次年度は対面実施を基本としながら、教育的効果を期待できる場合にはオンラインを活用する方針であることから、引き続き、対面とオンラインそれぞれの形態の利点や課題が明らかになるように、できるだけ多様な授業形態の相互参観を行い、教育方法や授業内容の質を高める議論を続けたい。

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など)	次年度への課題
情報科学部	全科目	15科目以上(延べ30回以上)	本年度は、ハイフレックス型授業を本格的に開始したため、春学期始めには、様々な科目でハイフレックス授業の実施方法を共有するための授業参観を行った。特に、プログラミング入門では、複数の教員が参観し、ハイフレックス授業のための授業の進め方を学んだ。 秋学期は、対面授業を強化したが、学生の授業参加数が伸びなかったため、定期的に授業参観して、それぞれの授業における学生の対面参加状況を共有した。この結果により、対面授業への積極参加を促す学部長メッセージを発信するに至った。 この他、複数教員による共同実施科目や、新任の非常勤講師による科目、英語科目などで、積極的に相互参観することで、授業の進め方、進捗などを共有した。	2022年度はカリキュラム改革を行うことから、担当科目が変更になる教員や、新任の非常勤講師による講義が増える計画である。カリキュラムツリーと関連する科目や、複数教員の共同実施科目を中心に、教員相互の授業参観を進め、情報共有を強化する。
キャリアデザイン学部	64科目	64科目	当学部では、年3回のFDミーティングを実施し、カリキュラム上の特に重要な科目群について、授業内の取組みや課題・改善点等の共有を行っている。本年度は、当該取組みをもって教員間での授業相互参観とすることとした。効果として、コロナ禍における各種取組みの情報交換や、カリキュラム改革に向けての整理ができたと考えている。その他、学部内情報共有ツールを用いて、オンライン授業に関する情報交換を行った。	対面型の授業科目における授業相互参観の実施および新たに導入される完全オンデマンド型授業の相互参観方法の検討が課題である。
デザイン工学部	・建築学科 17科目 ・都市環境デザイン工学科 学科主催の全科目(他学科学生との混成クラスを除く) ・システムデザイン学科 5科目	・建築学科 17科目 ・都市環境デザイン工学科 17科目 ・システムデザイン学科 5科目	・建築学科 建築学科においては、1年次から4年次に至る全てのデザインスタジオ科目をはじめ、フィールドワーク、ビルディングワークショップ、卒業研究・卒業設計において、全クラス合同の講評会を行い、兼任を含む教員が相互に他の科目やクラスの内容について理解し議論できるようにしている。さらには、公開の講評会により学内外に対して学習成果を公開し、学外からの評価を受ける機会を設けている。 2021年度は、大学院建築学専攻と合同で、昨年度から実施しているパーティカルレビュー(オンライン展示空間での学生・教員相互による成果物の講評会)に関して、さらに構法スタジオ、環境デザインスタジオでの成果物も追加し講評対象分野を広げ、より横断的に学習成果を共有、評価する体制を整えた。 以上に加え、スタジオ科目、フィールドワークおよび修士設計、卒業設計での優秀作品と、卒業研究の梗概を、それぞれ学科発行誌「法政大学スタジオワークス」、「建築研究」に掲載することで達成状況を共有している。また、年度末には、全スタジオ(デザインスタジオ1～11、基礎表現、構法スタジオ、デジタルスタジオ)の専任・兼任教員が一堂に会し、相互参観の感想を基本とした設計教育の振り返りと、新年度方針について討議する機会を設けている。 一方、各授業での活用資料や学生の学習成果はもれなくサーバーに蓄積されており、これを学生の自習のため、あるいは教員の授業改善また相互参観のための参考資料として閲覧できる仕組みを設けている。 ・都市環境デザイン工学科 毎年授業のビデオ撮影を実施している。今年度は遠隔で行われたZoom映像記録のアドレスや授業の録画映像を学科共有のディレクトリにアップロードし、当該教員および他の教員も視聴できるようにした。 ・システムデザイン学科 PBLを基本とした必修授業を中心に、全専任教員(外国人客員教員を含む)が参加して相互参観を実施しながら学生の指導にもあたった。学生は課題を調査し、その解決方法を企画立案し、企画・中間発表・試作・成果発表の各段階で全教員からのフィードバックを受け、学生と全教員が参加して講評を行う機会を設けた。今年度は対面とオンラインを併用し、学生の評価物に対して講評することで意見交換を行い、相互チェックした。授業中は作品動画の閲覧やチャット機能なども使いながら、全教員間で情報共有を行い、コミュニケーションを図ることができた。このような相互参観の機会を含めた共同指導体制をとることにより、学生の授業や課題の進捗状況を全教員が把握し、学生からの作品制作にかかわる質問などを共有し、適切にアドバイスや指導を行うことができた。	・システムデザイン学科 昨年度に引き続き、オンラインによる授業形態では、従来の対面型のPBL授業に比べ、学生が自宅で時間を効率よく使って集中的に取り組み、同時に多くの教員からのフィードバックを得られるメリットが活かされた。しかし教員は実際の作品を手にとって確認できないため、指摘漏れや評価の差異が生じる危惧がある。作品の完成度の確認や意見・評価の伝え方などに課題がある。
理工学部	548.5	25科目	1.実施時期 主に2021年度秋学期 2.実施方法 以下の2通りを実施した。 a)個別授業相互参観 ・コロナ禍ということで、オンライン実施の授業も対象とし柔軟に実施した。 ・専任教員は、全ての担当科目を原則として、期間内授業相互参観可能な科目とする。 ・専任教員は、担当教員に連絡の上、所定期間内は自由に授業参観をすることができる。ただし、授業運営の支障とならないように、特に配慮する。 ・相互参観希望者は、科目担当教員と事前に、科目、曜日、希望参観時間(15分～90分 任意)を調整し、教室内等で参観する。 ・参観した専任教員は、参観報告書(委員会提出用及び担当教員提出用)を記入し、各学科担当委員及び科目担当教員に、個別に提出する。 b)学科に特化した柔軟な運用による公開(学科別) 1.・学科別にa)とは別の形式で、学科独自の柔軟な運用を含む授業相互参観について検討・実施する(例 PBL、実験・演習、複数教員担当形式授業、研究室配属説明会、卒業・修士論文中間発表会を用いたプレゼンテーション能力の検討等)。	・授業相互参観の実施率の向上及び個別の授業参観報告書のフィードバック方法の検討 ・客観的な授業改善に関するチェックを簡易的に行えるシステムの検討(報告書含む) ・兼任講師を含めた、全授業における授業相互参観を継続 ・参観授業数を増やすこと

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など)	次年度への課題
生命科学部	春学期 94 秋学期 90	春学期 14(参観回数16) 秋学期 10(参観回数13)	生命科学部では、今年度、春学期(6月7日～7月3日)と秋学期(11月8日～12月4日)の2回、授業公開を実施した。昨年度の春学期は新型コロナの影響により公開科目数が少なかったが、今年度は例年通りの科目数で公開された(2020年度:142科目、2021年度:184科目)。今年度の参観回数は昨年度と比べ、春学期で6件、秋学期で1件増加した。授業参観者アンケートの自由コメント欄では、ハイフレックス授業を行う上でとても参考になったという意見が見られた。	参観回数が昨年度と比べ増加したが、まだコロナ禍以前のレベルには戻っていないため、来年度も継続して参加を促す必要がある。来年度に向けて、これまで参加していなかった教員にも参加してもらう新たな方策が必要である。
グローバル教養学部	春学期12科目, 秋学期6科目	春学期12科目, 秋学期6科目	春・秋学期ともに新規採用の兼任教員の科目を中心に授業参観を行った。ほとんどが対面での授業であったが、一部ライブ型オンラインの授業もあった。参観した専任教員はFDワークショップ(7/21と12/15開催)にて書面と口頭で各授業の工夫や苦労している点などを報告し、全専任教員で共有をした。対面授業では学生が積極的に出席したくなるようディスカッションやグループワークを設けるような工夫がなされている一方、ハイフレックスでオンラインで参加した学生にも同様な学習効果を上げることの難しさなどが指摘された。オンライン授業では、学生のカメラがオフになったままであることに伴い、授業に積極的に参加(発言)する学生に偏りが見られることや、学生全体の理解度の把握が難しいことなどが挙げられた。授業担当教員に対しては、授業参観を行った教員が口頭でまたは書面でフィードバックを行い、アドバイスをした。	昨年に引き続き、ハイフレックス授業の質の向上が課題である。対面授業であっても、科目によってオンラインでの受講を希望する学生の割合が異なり、また、その時々授業内容によっても授業の進め方を細かく調整する必要がある。ハイフレックス授業では事前の準備時間も倍増し、授業時間内で臨機応変な対応を求められることも多い。教員の負担を増やさずに授業の質を向上させる方法について議論を続ける必要がある。
スポーツ健康学部	全科目	18科目	コロナ禍が継続しており、相互授業参観については厳しい状況であった。オンライン授業実施となった科目も多いが、少人数の実技科目では対面授業も実施された。こうした状況を踏まえ、対面、オンライン授業について可能な範囲で対象とした。対面授業においては、学生による実技実践が学生の学びに効果的であった。また、外部講師による様々な経験談、プロスポーツやスポーツビジネスなどの現場での事例紹介などは、学生にとっても興味関心を引く内容であったと考えられる。	対面、オンライン授業のいずれにおいても、授業相互参観の実施により質の向上に努める。
市ヶ谷リベラルアーツセンター	全科目	13科目	ILACでは、①授業相互参観(従来型)、②授業参観による研修(新任教員対象型)、③セルフ授業参観(録画記録によるセルフレビュー型)、④教員相互授業情報交換会の4つをFD活動として位置付けており、2021年度は13科目で実施した。それらの多くがオンライン授業であったのが特徴的であった。また、オンライン授業に関しては、上記の授業相互参観の実施科目数には表れないが、同授業における工夫や効果的な取り組みについて、各分科会で意見を集約し、その上でILAC運営委員会にて情報の共有ならびに意見交換を行った。	2020年度および2021年度における取り組みを通じて、オンライン授業における工夫や効果的な取り組みの状況が明らかとなってきた。以上を踏まえ、2022年度においては、オンライン授業における利点を対面授業にどのように取り入れるのかという点について、授業相互参観等の活動を通じて検証していく必要があると考える。
小金井リベラルアーツセンター	専任教員が担当する全科目・および兼任講師が担当する一部科目 合計 約130科目(理工学部主催約100科目、生命科学部主催約30科目)	KLAC主催:10科目	1. 実施時期 春学期・秋学期授業実施期間 2. 実施方法 授業相互参観は、専任教員は全ての担当科目を原則公開とし、兼任教員については期間内での相互参観の可否を伺い、可能な場合には日程を設定していただくようにした。相互参観希望者は、科目、曜日、希望参観時間(15分～100分・任意)を事前調整し、オンラインにて行った。参観した専任教員は、指定の参観報告書を記入し各分科会単位でとりまとめ、運営委員会メンバー間で情報共有を行った。	教養教育は、分野が多岐に渡るため、例えば、分科会単位で授業相互参観重点分野を指定し、実施するなど、質の面からのアプローチも検討する。
SSI(スポーツ・サイエンス・インスティテュート)	全科目	未実施	新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、急遽、オンライン授業に変更せざるを得なかったため、本年度は実施出来なかった。	2021年度については、対面もしくはオンラインであったとしても、計画的に実施していく予定である。